

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こまったときの 聖人の 望み 繚鳥



イラスト 中川 学

楽しい「易行の水道」

「名人、達人が「こうすればうまくいく」と言っていることを試しても全

まぜんか。このようにことごとくありませぬか。名人、達人が「こうすればうまくいく」と言っていることを試しても全

私たちが能楽師はセリフを覚えなければいけません。能のセリフは現代語ではなく古語です。覚えにくい。能の師匠からは「百回謡えば覚えらる」と言われました。

言われた通りに百回謡いました。全然ダメ。先輩

然ダメ。本に書いてある通りにやってもうまくいかない。そういう時はどうしたらいいのでしょうか。このことを考えるために孔子や弟子たちの言行録である『論語』の話から始めたいと思います。『論語』の中に「切磋琢磨」という言葉があります。これは「お互いに競い合って上を目指す」という意味で使われています。しかし、『論語』を読むと、どうもそれは違うようです。

イヤなことは体に悪い

切磋琢磨は『論語』の「学而」編に載っています。登場人物は、孔子と子貢という弟子です。弟子である子貢が孔子に向かってこのように言っています。「貧しくも人に媚びへつらうこと無く、お金持ちになっても人に対して驕ること無いというのはいかがでしょうか」と。

すると孔子は言います。

「まあ、いいだろう。だが、貧しくして道を楽しみ、お金持ちになっても礼を好む者にはかなわないかな」と。

する人がいます。その人に「遅刻をしてはいけない」といつても、遅刻のクセはなかなか抜けません。生徒や児童の場合、怖い先生が担任になったら、その先生が担任の間は遅刻をしないかも知れない。しかし、担任が変わるとまた遅刻するようになる。これは大人でも同じです。

女王陛下から直々の親書が三度も送られ、それだけでなくスウェーデンの海軍提督が軍艦でデカルトを迎えに来ました。こうなれば行かないわけにはいきません。デカルトはフランスを発つてスウェーデンに着きました。翌年の一月から、女王のために講義を行うことになった。

子貢曰わく、貧しくして諂うこと無く、富みて驕ること無きは、何如子曰わく、可なり。未だ貧しくして道を楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなり。

それではあまり意味がないし、無理が起きることもあります。デカルトという人がいました。フランスの哲学者、数学者です。彼は早起きが苦手。朝早くに起きることができず、毎朝ベッドの中でぼやぼやしていました。

ところがこの女王、デカルトとまったたくの逆の朝型の人。「朝廷」という言葉があるくらいですから、宮中の行事は朝から行われるのが通例。女王のための講義は、朝五時から始められることになったのです。

弟子の子貢は「く無く」を使っています。「くしてはいけない」という禁止です。それに対して、孔子は「楽しむ」とか「好む」という快感を引き出す言葉を使っています。

しかし、デカルトにとつてはベッドの中の、このぼやぼやの時間は、哲学や数学のことを考える、とても大切な時間でした。

これは朝寝が大好きなデカルトにとつてはキツイ。講義を始めて一カ月ほど経った二月。デカルトは風邪をひきました。そしてそれをこじらせて肺炎になり、とうとう亡くなってしまうのです。自分が苦手なことを無理して行うと病気になる、ついには死んでしまうこともある。

「くしてはいけない」という禁止は、その人の本質まで変えることができることが多い。

デカルトはフランスだけでなくヨーロッパ中に知られていました。ある日、スウェーデンの女王が彼を宮廷に招きました。

女王陛下から直々の親書が三度も送られ、それだけでなくスウェーデンの海軍提督が軍艦でデカルトを迎えに来ました。こうなれば行かないわけにはいきません。デカルトはフランスを発つてスウェーデンに着きました。翌年の一月から、女王のために講義を行うことになった。

イヤな仕事をしたり、イヤな人と一緒に何かをしたりすると病気になるってしまうことってあるでしょ。

これが「くしてはいけない」という禁止の危険性です。

居心地の悪い子貢

実は子貢がああ言ったのには理由があります。

孔子のグループで、孔子が一番弟子だとしていたのは顔回という弟子でした（顔淵ともいいます）。

彼はとても貧しく、食事はひさびさ一杯の飯とひょうたんいっぱい汁だけ、住んでいるところも狭い隘路でした。顔回だけでなく原憲という弟子もとても貧しかった。

孔子グループの中では、おそらく「清貧」がよしとされていたのでしよう。

それに対して子貢はまったく逆。司馬遷が書いた歴史書『史記』の中で、お金持ちを集めた「貨殖列伝」に子貢は

載っています。

子貢は政治家として活躍しましたが、それだけでなく交易や流通によってお金持ちにもなりました。食事や住まいに困らないのはもちろん、乗り物も高価な四頭立ての馬車。しかも、騎馬のお供すらしたがえていた。いまでいえば運転手付きの高級外車に乗り、しかもそれを護衛する車までついていっているようなもの。

各国の君主と会うときには、貨幣と同じ意味の帛の束をたくさん贈り物として持って行ったので、どの国に行ってもその国の君主は子貢を対等の礼で迎えたといえます。すなわち子貢はビジネススマンとしても政治家としても成功をした人だったのです。

が、子貢は孔子を心から尊敬していた。そして、孔子が一番弟子とする顔回も尊敬していた。

「自分が子貢だったら」と、想像してみてください。「清貧」が大切というグループの中で、自分

だけがお金持ち。彼は居心地が悪かったはず。ひよつとしたら、そのグループの中にいるときは針の筵に座っているような気持ちだったかもしれない。

しかし、彼はここから離れたくない。

だからこそ出た「貧しくして諂うこと無く、富みて驕ること無き」です。子貢はかなり無理をしています。

その人に合った道

孔子はそれに気づいていました。子貢に「無理をしてはいけないよ」といいます。

たとえば登山です。貧乏な顔回も、裕福な子貢も目指す山の頂上は一緒です。顔回は貧乏が性に合っていた。だから貧乏という登山道を通じて頂上を目指す。

「しかし、お前は顔回とは違うんだよ」と孔子はいいいます。

子貢はお金儲けが好き、政治だって好きなはずで

す。だから、お前は自分が好きなビジネスや政治という登山道を通じて山に上ればいい。「楽しい」こと、「好き」なことを通じて山に上ればいい。お前が顔回のマネをして貧乏なんかしたら、お前の才能はダメになっちゃうよ、と。

そのとき子貢はハッと気づいて孔子にいいいます。「先生、それが『詩経』でいう『切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如く』なんですね！」と。

切・磋・琢・磨。この四つは原石に磨きをかけて付加価値のあるものにする、その研磨方法をいいます。「切」というのは骨の研磨方法、「磋」は象牙、「琢」は玉、「磨」は石に対する方法です。

原石にはおのおの、それぞれにあった研磨方法があります。たとえばダイヤモンドを磨く研磨機で真珠を磨いたらダメにしてしましますね。それと同じように人にはそれぞれ、その人にあった磨き方が

あります。

お金の好きな子貢には子貢の、貧乏が好きな顔回には顔回の磨き方がある。それが「切磋琢磨」なのです。それを間違えたと無理が起きますのです。

子貢のこの言葉を聞いて孔子は喜びます。

「おお、子貢。これで

お前と『詩経』について語れるようになった。お前は聞いたことをそのまま理解するだけでなく、自分のこととして理解できるとなりました。」と。

易行の水道

最初に能のセリフを覚えることについて書きました。「百回謡う」というのは師匠が見つけた登山道です。

私たちは師匠とは違う人間です。自分にあつた登山道を見つけないと必要なのです。

それが自分にあつた登山道かどうかを知る方法はたつたひとつです。

それは、その道が自分にとって楽な道かどうか

ということですよ。

親鸞聖人は龍樹菩薩のお言葉として次のようなものを紹介しています。

「難行の陸路は苦しきことを顕示して、易行の水道は楽しきことを信衆せしむ」 『正信偈』

苦しい難行苦行の修行ではなく、阿弥陀様の救いの船に乗って、楽な水路を通ってみんなで極楽浄土に行きましょう！と。難行苦行の苦しい道は、たとえばブレーキをかけて自転車を漕いでいるようなもの。汗水たらして一生懸命やっている。努力はしている。しかし、全然前に進まない。

それどころか、自分の体や心も壊してしまうおそれもある。何かをするときには、自分に合った楽な道、楽しい「易行の水道」を見つけないと大事なのです。

そして、それは実はすぐそこにあります。それが見えていないだけ。